

【教員寄稿】

私の学生時代—ポルトガル語のニュース記事でブラジル社会に触れる

山崎圭一*

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私は、横浜国立大学の経済学部と大学院で、ブラジル経済をふくめた途上国経済を教えている研究者ですが、2016年から、こちらのポルトガル語学科で春学期に非常勤講師として授業をさせていただいています。それは、ポルトガル語で経済学や経済事情（日本とブラジル）について討論するという演習の授業です（授業名：日本・ラテンアメリカ比較演習：日本とブラジルの経済）。2019年度が最後の年になりますので、がんばりたいと思います。私は大阪生まれ、大阪育ちで、ブラジル研究は大阪市立大学の大学院で進めていました。30年以上前のことですが、当時から情報をもとめて東京へきて、上智大の図書館や研究センターを利用させていただきました。ここは、ブラジルを研究する上で、日本で最も重要な研究拠点の1つなのです。神奈川県に引越してから、ラテンアメリカ関係の学会活動でよく上智大には来ますので、なじみの深い大学です。

1 ラテン語に四苦八苦

私の出身学部は大阪外大で、1年生、2年生の頃は外国語を中心に勉強していました。メインは英語でしたが、第2外国語はポルトガル語を選びました。その前に、ラテン語を履修していたので、ロマンス系の言葉であるポルトガル語だったら楽だろうと、安易にそう考えたのでした（それは愚かで、実際は楽ではありません）。私にはラテン語は難しく、授業は月曜日でしたが、わずか10行ほどの **prose** や **poetry** の予習のために、週末の10時間以上を費やしました。ラテン語では、代名詞だけでなく、普通名詞も格変化します。文の中での位置はかなり自由です。文頭の名詞が主語とは限りませんから、宿題の1行目の1語目から、頭を抱えてました。私には、ほとんど暗号解読の作業でした。学んだ内容は忘れてしまい、カエサルの有名な「**Veni, vidi, vici**（来た、見た、勝った）」が、記憶に残っている程度ですが、それでも学習したことは現在の学力の土台の一部にはなっているはずだと、信じることにしています。

ラテン語の先生は、山末一夫教授（比較言語学、ギリシャ語も隔年で担当）でした。授業では実は落ちこぼれていたと自己評価していますが、なんとか単位を下さいました。先生は、その後、私が在学中に病気で他界されました。ショッキングな出来事でしたが、先生の丁寧な授業には感謝の気持ちしかありません。山末先生の解説が面白いので、出席を続けることができたのです。

私はドイツ語とスペイン語も、履修登録をしたのですが、いずれも相性があわないのか、6月頃にドロップアウトしました。動詞の **conjugation** の学習がはじまると、意欲がほぼゼロにまで落ちてしまうのでした。卒業に関してまぜい状況になりました。3度目の正直で、第2外国語にポルトガル語を選んだときは、卒

業のためには絶対に単位を落とせないという状況でした。崖っぷちにたった状況で、ポルトガル語の学習を始めました（ラテン語は卒業に必要な第 2 外国語にはいっていなかったと思われる）。

2 ポルトガル語を学び始める

「非ポル語生」向けの授業として、会話と文法と講読の 3 つが提供されていました。会話は日系ブラジル人の先生がご担当で、楽しく学ぶことをモットーにされていたと思います。実際楽しい授業で、ポルトガル語への親しみが自然に高まりました。文法の授業のご担当は東明彦先生（ブラジル史）で、毎週手作りのプリントで、2 年間かけて初級から中級まで、丁寧に規範文法を教えてくださいました。講読が有水博先生（旧ポルトガル植民地史、西洋史）です。先生は、大阪外大にポルトガル語学科が 1979 年に創設されたのち、2 番目に赴任された専任教員で、その後定年までこの学科の支柱のお一人でした。初級文法をおえたばかりの私たち「非ポル語生」に、難しい教材が使われました。それは総合週刊誌 VEJA の記事でした。予習範囲のすべての行に未知の単語があり、その予習には毎週数時間かかりました。この教材は私たち「非ポル語生」には難しすぎる、と思いましたが、先生はこの水準は当然という感じで、淡々と授業を進められました。先生は、関心のあるテーマを伝えると、毎週それにあわせた最新の VEJA の記事を探してきて、教材として配布されました。中級レベルの文法を知らない段階でしたが（中級の文法は同時平行で履修中）、卒業のために、とにかく辞書と文法書を片手に読みすすめました。

どの記事も、内容はエキサイティングでした。日本では想像できない、起こりえないような経済・社会の不思議な事件がブラジルではときどき発生します—むしろ日本は日本で、ブラジル人には不思議におもえる事件が発生しているのだと思います。それらを読んでいるうちに、ブラジルという社会への関心が強くなりました。当初私は言語学に関心がありましたが、VEJA 誌講読の授業がきっかけで、関心が社会や経済へ移りました。そこで、ポルトガル語の勉強は続けましたが、所属する英語学科のコース選択では、経済学の「ゼミ」を選びました（当時大阪外大では厳密にはゼミ制度はなかった）。そして大学院は大阪市立大学へ移り、経済学を専攻しました。後期博士課程（ドクターコース）を終えて横国大の経済学部へ赴任し、現在に至っています。このように、言語学をやめて経済学・社会科学へと切り替えた重要なきっかけの 1 つが、ポルトガル語でブラジル社会に触れたことでした。

最後に一言。中途半端な水準でウロウロしていると、ポルトガル語学習も、それを使つての専門の勉強や仕事も、おもしろくなりません。一気に、ある程度高い水準まで駆け上がってください。そこから先が面白い。ポルトガル語を修得し、それを使つてどう世の中に貢献したいのか、具体的な「志」（こころざし）を持ちましょう。するとさらに勉学意欲に勢いがつきます。語学学習と専門研究の両面で、学習・研究が効率的に進むことを祈っております。